
かわとはきものギャラリー展示・収蔵品の紹介

2. 日本のはきもの（2）

都立皮革技術センター台東支所

今回は、前回の下駄に引き続き草履など鼻緒式のはきもの及び伝統文化や信仰などと結びついたはきものを紹介する。

歩行に多く用いられたのは草鞋で、足に紐を巻きつける機能的なものである。

下駄や草履は、和服の生活に合わせて足袋で履いたり素足で履いたりした。庭下駄や茶会用のものなどレジャーに用いたり、職業・芸能用に特別のものが作られるなど日本の「はきもの文化」として大切なものである。



おこぼ



女兒用ぼっくり



草履（ぞうり）



草鞋（わらじ）



足半（あしなか）ぞうり



茶会ぞうり

日本の歴史的なはきものは、中国大陸や朝鮮半島からの影響を受けたものが多く、特に貴族や文官、武官が位階によって装束に用いたものは奈良時代から平安時代に定められている。

奈良東大寺二月堂で春を告げる行事御水取で僧がはくのは差懸という板底のはきものである。また、各地で行われる流鏝馬では物射沓がはかれる。

日本の伝統的な儀式などに用いられるはきものは、伝統工芸の技術が活かされ、漆塗や桐の木の上に錦や綾を張った豪華なものもある。



浅沓 (あさぐつ)



男子礼装用鞣 (かのくつ)



差懸 (さしかけ)



男子朝服用深履 (ふかくつ)



物射沓 (ものいぐつ)



女子礼服用繡線鞋 (ぬいせんかい)



鴨沓 (かものくつ)